

## 実践してはじめて倫理となる

上 廣 榮 治

会友の方々とお話ししていて楽しいことの一つは、ときには、皆さんの取っておきの話などが出てきて、何事かを学ばせていただけれることです。

先日、家族そろって会友だという婦人が話してくれました。部活でバンドをやっているという元氣印の女子高生の娘さんが「楽器は倫理と似ているね」と言ったということです。母がそのわけを尋ねると、「楽器は弾かないと音が出ない。倫理も実践しないと身につかないじゃん」と答えたそうです。母が感心すると、さらに娘さんは「指先が楽器の鳴らし方を覚えているように、身体が実践を覚えているんだよ」と、鼻をうごめかしたとか。

いま彼女は、特に「ハイの実践」と「上機嫌の実践」がお気に入り、不本意な場面でも素直に「ハイ」と言えたときには自分で自分を褒めてやり、面白くない気分になったり、思わず反発してしまったときには、「あああ、失敗しちゃったよ。これじゃあ倫理の持ちぐされだよ」と自分に言い聞かせて反省するのだそうです。

なるほど、倫理は大自然の摂理の賜物であり、人間誰にでも備わっている宝物です。だから、せっかくの倫理を役立てなかつたら「宝の持ちぐされ」であり、さらにいうなら「倫理の持ちぐされ」だということわけです。

この話をうかがったとき、私は思わず膝を叩いてしまいました。「楽器は倫理と似ている」という指摘からも、「倫理の持ちぐされ」という表現からも、若者らしい生き生きとした感性が伝わってきます。私には、それがとても嬉しく頼もしく思えたのです。

またある日、劇画好きの壮年の会友から、「机の上で学ぶより肌で学ぶ」という言葉を教えてもらいました。「机」という字と「肌」という字はよく似ています。木偏と肉月の違いだけです。また、「机の上で学ぶ」とは理論や理屈を学ぶことであり、「肌で学ぶ」は実践で学ぶことだということも推察できます。彼によれば、この言葉は『ゴルゴ13』の作者として知られる、さいとうたかをさんの自叙伝『俺の

後ろに立つな』に出てくるもので、さいとうさんは「自分のことを、『机の上で学ぶより肌で学ぶ』ほうだと書いているといえます。学生時代も、授業より実体験から学習するタイプだったというのです。さいとうさんが、小学校の授業で最初に理解できなかったのが「1+1=2」だったそうです。

——先生が黒板に書いた二つの「1」の大きさが微妙に違ったのが私の「なぜ」を刺激した。そこにある「1」は明らかに違うのに、答えは「2」というのが納得できなかった。わかりやすく言うなら、一つのリンゴと一つのリンゴを足せば二というのは理解できたとしても、一つのリンゴと一つのみかんを足しても二になるのか？——

こうした疑問に取りつかれて、さいとう少年は算数が苦手になったといえます。

この話から、もう一つの算数の授業と黒板の話の思い出ししました。評論家の鶴見俊輔さんが著書『思い出袋』の中で、一年生の算数の授業での、ある出来事を紹介しているくだりです。

——先生は黒板に白墨で丸を書いて、くぼった答案用紙に同じものを書いてごらんといった。一年生はすぐ答えを書いて、ハイ、ハイと手をあげた。その中に、手をあげない子がひとりいた。先生はその子のそばにじつと立って感心していた。書き終わると、先生はその子の答案を皆に見せて「○○君はこういう答えを書きました」と言った。その答案は黒くぬりつぶされ、その中に白い丸が注意深く塗りのこされていた。

ここからは、先生の指示どおりにしようと、懸命に鉛筆を動かして紙面を黒く塗りつぶしている一年生と、それを感じしながら、辛抱強くじつと見つめている先生。そんな情景が浮かんできます。

もしも先生が、鉛筆で丸を書けばいいのだよと、すぐに教えたとしたら、その子は答案の書き方の常識を「机の上で学ぶ」ことになったでしょう。しかし、先生はそうしませんでした。干渉しすぎず、子どもの自主性を尊重し、見守ることのできる先生でしたから、その子は一生懸命に紙を塗りつぶし、作品を完成させることができたのです。その結果、彼は多くのことを「肌で学んだ」に違いありません。

この先生なら「○○君の答えは正しい」と言って花丸をつけ、なぜ正しいかを話したでしょう。他の生徒たちの答案にも花丸をつけて、世の中には、答えが一つとは限らないことを、皆に教えたことでしょう。またある日、鹿兒島出身の会友から「ぎをゆな」という言葉を教わりました。薩摩藩独特の郷中教育から出た言葉で、「議を言うな」の意味だそうです。

それは、しばしば「文句を言うな」「つべこべぬかすな」「問答無用」「不言実行」などの意味にも使わ

れますが、本来は、「議」は「理屈」のことで、「理屈が行いより前に出てはいけない」という意味だそうです。実践倫理に置き換えれば、「倫理の理屈が実践より前に出てはいけない」ということになります。

先師はよく「実践倫理は確かなものよ、遣っただけしか分かりやせぬ」という自作の都々逸を洪い喉で唄っていました。もちろん「遣る」とは「実践する」という意味ですから、倫理は実践しただけしかわからない、理解できない、身につかないという、すごく単純明快な事実を述べたものです。

ということは、倫理には実践しただけ身につく楽しさがあり、実践しただけしか身につかない厳しさがあるということでもあります。実践もせずに倫理を理解したつもりになってはいけないという戒めでもあったのでしよう。

理論と実践の関係は、スポーツのことを考えればよくわかります。たとえば「畳の上の水練」ということわざがあります。いくら水泳の理論を究め、畳の上で稽古をしても、水の中では何の役にも立たないということなのです。水に入って泳いでこそその水泳なのです。どんなにすぐれた水泳理論も、水の中で実践してはじめて、身につくのです。実践してはじめて、その理論を理解したといえるのです。

倫理も同じです。実践してはじめて真の倫理になるのです。実践なき倫理とはいえません。

ここまでご紹介した「楽器は倫理と似ている」も、「机の上で学ぶより肌で学ぶ」も、「ぎをゆな」も、「遣っただけしか分かりやせぬ」も、すべてに共通するのは、実践の大切さということなのです。しかし、実践だけすればよいというものではありません。理論なき実践には限界があり、倫理なき実践は過ちのもとです。倫理と実践は一つになってはじめて、我にも人にも仕合わせをもたらすのです。

だから私たちは毎朝誓うのです。「今日一日 気付いたことは 身がるに直ぐ行います」と。